

## 短期大学保育学生の災害支援ボランティアからの学び

八尋 茂樹<sup>1)</sup>\*

1) 新見公立短期大学幼児教育学科

(2018年11月21日受理)

平成30年7月西日本豪雨災害によって被災した地域でのボランティア活動に参加した保育学生が、福祉的な視点からどのような学びを得て、どのような自己覚知に達したかを整理した。災害発生当初は、危機的な状況にさらされる可能性がありながらも、災害や防災への意識が低かったが、災害支援ボランティア活動後の振り返りでは、当事者意識を持つこと、自分にとって当たり前に見えることが他者にとって当たり前ではないかもしれないという価値観の確認（自己覚知）、支援者を支援する立場（メタサポート）が重要であること、挨拶やお礼といった基本的なことに始まるコミュニケーション力の重要性、短期的だけでなく長期的な展望での支援、無関心であってはならないことなど、多くのことを学び、今後の保育現場での自己の鍛錬に繋がることがわかった。

(キーワード) 災害支援ボランティア、保育学生、地域交流

### 1. 保育学生の防災や災害に対する意識の現状

平成30年7月西日本豪雨災害が発生し、本学が所在する新見市も一部被災した。豪雨が襲った7月6日の災害対応の経過は表1の通りであった。

表1 災害対応の経過

時刻	発令等
15:10	土砂災害警戒情報発令
19:39	大雨特別警報発令
20:45	新見市全域に避難指示
21:00	新見市内に64の避難所開設

大雨特別警報発令とは、気象庁が大雨、地震などの警報の発表基準をはるかに超える大雨が予想され、甚大な災害が起こる可能性が高いと判断した時に、最大級の警戒を呼びかけるものである。新見市内も大雨特別警報が発令され、千屋ダム放流のサイレンが響き、尋常ではない雰囲気にも包まれていた。特別警報発令から約1時間後には新見市全域に避難指示が出され、64ヶ所の避難所が開設された。本学体育館も避難所となったが、学生が避難してくる様子はほとんど見られなかった。

警報解除後に再開した授業において、本学の保育学生に避難したかどうかの質問したところ、実に8割以上の学生が避難しなかったことがわかった。避難しなかった理由は

以下の通りであった。

- ・自分の部屋はアパートの2階(以上)だから浸水しないので、大丈夫だと思った。
- ・今まで警報がよく出たけど、被害にあったことがないので大丈夫だと思った。
- ・アパートの他の部屋の学生の様子を見てみたけれども、誰も避難する気配がなかったので、避難しなくても良いと思った。

実際のところ、この豪雨災害で新見市において被災した地区は神代、哲西、井倉、草間、足立、唐松、長屋と、本学学生のアパートのある西方、高尾地区から離れており、結果的に事なきを得た。そのため、質問時も避難する必要性を感じていない学生がほとんどであり、甚大な被害を受けた倉敷市真備町や高梁市は別の世界のような捉え方をしていた。また、災害や防災に対する知識や意識も決して高くなく、「真備町では2階まで浸水したため、2階以上の人たちは逃げ道が閉ざされて孤立した」ことを伝えると、自らが取った行動が実は危険な選択であったことを感じる学生も出てきた。あるいは、自己の災害への意識が低いことを反省する意見や、さらに具体的に「小さな命を預かる専門職に就くことを目指す保育学生として、災害時に自らが危機に対する意識が低いことは良くないことである」という感想も出始めた。阪神淡路大震災発生当時はまだ生まれておらず、東日本大震災発生当時でも中学生であった学生たちは、災害に対しての関心や意識は決して高くなく、むしろ低くなってきているような印象を受けた。大学

\*連絡先：八尋茂樹 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

生や短大生の防災や災害に対する意識調査は医療分野に携わる看護学生の文献は見られるが<sup>1)</sup> 2)、保育学生に関する研究はなされていない。

## 2. 災害ボランティアへの参加

新見市では簡易水道が全戸断水状態にある井倉地区(80戸、130人)、草間台地区(540戸、1,270人)への支援物資移送のボランティア活動を行っていた看護学生に加わる保育学生が少しずつ出始め、井倉市民センター、土橋交流センター、草間市民センター、足見ふれあいセンターでセンター長や地域振興会長、市民の方々と接点を持ったり、給水車対応の現状を見たりするようになった。その際に、物資を受け取って涙ながらにお礼を伝えてくれる市民の方や、号泣されたセンター長の姿を見て、もらい泣きをする学生もいた。

その後、新見市内の断水が解除されたものの、真備町の復興には多くのボランティアが必要であり、その実情をメディアなどで知った保育学生から、真備町での災害ボランティア参加の相談が寄せられるようになった。そこで、ボランティアを希望する保育学生12名は、筆者と共に真備町復興支援活動として8月に4回、9月に6回の計10回、倉敷ボランティアセンターを介して被災地支援を行った(図1)。



図1 ボランティアセンターを介しての支援活動

真備町での支援活動の作業内容は、具体的には公共の場や田んぼや畑にたまった瓦礫撤去作業、個人宅の依頼による浸水家屋の壁や床の剥がし作業、2階まで浸水した家屋の場合、2階からの家具などを運び出す作業などが中心であった。いずれの作業も午前10時頃から始まり、午後2時半頃に終了のスケジュールとなっており、また、酷暑の中での作業であるため、熱中症対策として20分ごとに10分の休憩を挟むルールのもとで進められた。あらゆる物が洪水によって泥だらけになったとは言え、全て私物であることもあり、原則として依頼主が現場に滞在し、依頼主に確認し

ながらの作業であった(図2)。



図2 災害ボランティアの実際の作業

また、受付となるボランティアセンター(中国職業能力開発大学校体育館)や、真備町菌・川辺サテライト(まび記念病院駐車場)、真備町箭田サテライト(倉敷市真備支所駐車場)には、様々なボランティアの心得などが書いてあり、学生たちは熱心に読んでいた。例えば、配慮事項として「住民の方々との何気ない会話から新たなニーズが見つかります。気になった事はリポートに報告を(×可)」

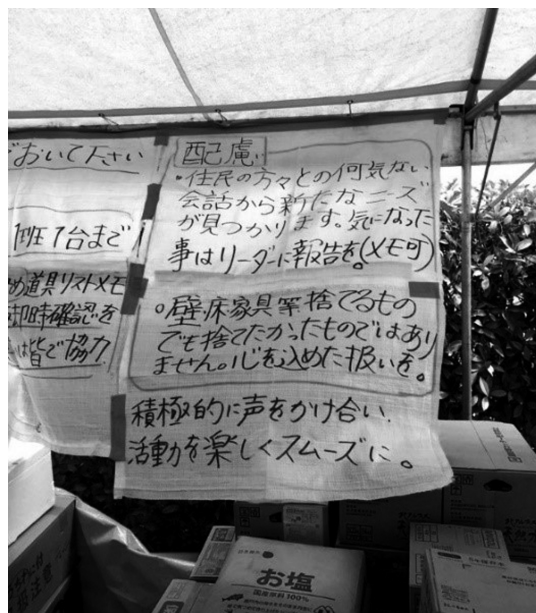


図3 サテライトに掲示されていた配慮事項

可)」、「壁、床、家具等捨てるものでも捨てたかったものではありません。心を込めた扱いを」、「積極的に声を掛け合い、活動を楽しくスムーズに」という文言に声を上げていた。これらは、作業に対していかに真剣に取り組むかという強い意気込みのみを抱えて被災地に到着した学生たちにとって非常に衝撃的で、現場に向かう前のセンターやサテライトの段階から多くの学びを得ていたと思われる(図3)。次節以降で、保育学生たちが災害現場で何を学び、その学びを保育の分野でどのように生かしていくことができるかと考えたかを整理する。

### 3. ボランティアに参加した学生の感想

岡山県は晴れの国と呼ばれ、災害から縁の遠い地域である。このような甚大な災害に見まわれたことは稀有であり、岡山県民が自県で災害支援活動を行うこともほぼ初めてのことであった。本学の学生も同様で、真備町での災害ボランティア活動に参加した学生たちも全員初めての体験であった。よって、活動の際の服装や持ち物から、作業内容や注意事項まで全ての事柄が勉強となった。

毎活動後に学生に感想や気付き、学びについて任意で意見を求めたところ、活動に携わったことへの充実感と共に、以下のような報告があった<sup>3)</sup>。

- ・まず、ボランティアセンターおよびサテライト、被災現場の全てに、ボランティアをする私たちのお世話をしてくれる方々がたくさんいた。自分たちが作業をスムーズに出来るのは、こういった人たちのおかげであると思った。
- ・ボランティアに来た人を誘導する人や熱中症対策グッズを手渡す人など、沢山の役割を持つ人がいてこそ災害支援は成り立つことを学んだ。
- ・サテライトに常備されている道具や移送のための車なども全国の支援者の善意によって集まっていることを知った。こういった目に見えない形の支援の心や気持ちに気付くことができた。
- ・災害直後に通過した汚れた道が、1ヶ月後にはきれいになっていた。私たちが何気なく、当たり前のように過ごしている場所も、誰かのおかげで綺麗に整備されているかもしれないと思えるようになった。
- ・先日、かつて被災し、復興した場所に遊びに行った時に、災害ボランティアをしていなかったら、ただ楽しいと思うだけで帰ってきたと思うが、災害ボランティアをしたことで、自分が楽しめたのは、他の誰かがこの場所を綺麗に戻し、このような良い環境を作ってくれたからだ、とても感謝する気持ちを持つことができるようになった。そして、今、自分が当たり前のように勉強したり、生活したりしている環境も、他の誰かのおかげであると感じるようになった。

・ボランティアセンターで、「作業だけに一生懸命になるのではなく、被災された依頼主との会話も重要である」と教えられた。辛い思いや不満などの感情を聞かせていただく傾聴については授業で習っていたが、復興支援活動ではとても必要であると実感した。

・最初に依頼されていた内容と、被災された依頼者が現場で希望された内容が異なる場合に戸惑う場面があった。そして、現場で依頼されたことを優先させた。

・被災すると全てが瓦礫やゴミのように見えるが、被災者の思い入れの強い大切な物であったりすることがあるので、見た目だけで雑な判断をしてはいけなことを学んだ。

・ただ作業をし、できるところまですれば良いというわけではなく、被災された方はもちろんのこと、作業をしているボランティアスタッフも、綺麗になったと実感できるような形で終わることができるようにすることで、復興が進んでいると前向きになれることを知った。

・活動後にお礼の手紙をいただくこともあった。手紙を読むと、自分たちが夢中になって取り組んでいた活動の意義、喜びや充実感を冷静になった時に振り返ることができ、実感できた。

・被災された方々との会話をする際に、自分自身に当事者意識がなければ、不用意な言葉を発してしまうのではないかと痛感した。

・今まで災害に無関心だった自分が恥ずかしく思った。実際に被災地に来ずに、大きなブルーシートに覆われた場所や、ドアや窓が開けっ放しとなった家々を目にしなければ、これからも無関心のままで、困っている人がいても家でゴロゴロしていたと思う。

・勉強のつもりで被災地に来たが、その当初の目的を遥かに超えて、目の前で困っている人たちに対して自分が何ができるのだろうかという人間性の部分で行動しなければならぬと強く思った。

・仕事の合間を縫ってボランティアに来られている方とたくさん出会って、困った人たちに寄り添おうとする姿勢に感動した。

・他県からたくさんの方々が活動に来られていて、同じ目標に向かって一生懸命に活動し、様々な新しい繋がりができることがうれしかった。

・被災地に行くようになってから1ヶ月以上経っても、誰も住んでいない家がたくさんあり、1回1回の活動を大切にしながらも、息の長い支援が必要だと感じた。

・ボランティアである自分が無理をして現場で倒れてしまったら、多くの人たちに迷惑をかけ、何をしに行ったかわからなくなるので、活動当日までの健康管理は大切だと思った。

・活動後にボラセンに無事に戻ってくるのが大切な目標と聞き、他人のためではあるけれども、自分のこともと



でも大切にしなければならないのだと思った。

ここで挙がった感想をもとに、「保育学生としての振り返り」についてのコメントを任意で求めたところ、以下のような意見が出た<sup>4)</sup>。

- ・自分が保育園や幼稚園に勤務する時、園の環境は自分以外の誰かが整備したり準備してくれたりしたものであって、当たり前環境だと思ってはいけない。その環境に感謝し、自分もその環境を作り上げる一員として努力しなければならない。

- ・保育者ひとりでは頑張るのではなく、保育者は他の保育者たちに支えられながらチームとして動き、互いに支え合いながら子どもたちや保護者と向き合うのだと思った。

- ・子どもたちや保護者の持っている物や気持ちは、私たちにとって何でもないものであっても、当人たちにとっては大切な物や思い出などであるかもしれない。自分の価値観で子どもたちや保護者の価値観を決め付けてはいけなかったと思った。

- ・保育の知識や技術を学ぶことと同時に、それを必要としている子どもたちや保護者たちとのコミュニケーションを上手に取れるようにならないといけないと思った。傾聴を含む上手なコミュニケーションは、子どもたちや保護者たちの隠れたニーズに気付かせてくれると思う。当事者意識を持つことは難しいが、当事者意識に近づける気持ち、努力は大切だと思う。

- ・決して無関心であってはならないと思った。自分が担当の子どもでなくても、余計な手出しはしてはならないが、決して無関心になってはいけないと思う。テレビやネットで流れてくる虐待のニュースとかも他人事と捉えてはいけなかったと思った。

- ・保育は自分にとって仕事となるのはわかっているが、それを越えた人間性の部分で目の前の子どもや保護者、同じ先生たちと向き合っていくべきだと思った。

- ・がむしゃらに仕事をするのも良いことかもしれないが、しっかりと計画を立てて、園児や保護者、同僚の先生たちが「ここまで達成した」という実感が持てるような1日の終わり方を心がけると良いと感じた。

- ・お互いに感謝する気持ちが大切で、感謝は相手の気持ちを前に進めると思うので、感謝する気持ちをしっかりと表現できる保育者にならないといけないと思った。そのため、日頃から挨拶やお礼といった基本的なことはしっかりとすべきだと思った。

- ・子どもたちの成長や保護者との関係に一喜一憂すると思うが、その場面だけで満足することなく、子どもたちが卒園するまで、あるいは、卒園した後も気にかけるような、息の長い保育相談支援ができるようになりたいと思った。

- ・日々の保育を頑張るためには、日々の健康管理が大切だと思った。実習の時に体調を崩してしまったが、それによ

って多くの人に迷惑をかけた。日頃から規則正しい生活を送り、健康な状態で保育に携われるようにならないとあらためて思った。また、頑張らなければならないのは当然だが、無理な状態で頑張りすぎて迷惑をかけるようにすることも重要であると思った。

#### 4. まとめ

前節での学生の振り返りから、災害支援活動を通して、当事者意識を持つこと、自分にとって当たり前に見えることが他者にとって当たり前ではないかもしれないという価値観の確認（自己覚知）、支援者を支援する立場（メタサポート）が重要であること、挨拶やお礼といった基本的なことに始まるコミュニケーション力の重要性、短期的だけでなく長期的な展望での支援、無関心であってはならないことなど、多くのことを学んだ。保育学生たちは、例えば「思いやりや寄り添い」、「孤立させないように共に歩む」ことを講義や演習、実習で学ぶ。それらが身についているかを確認していくためには、保育現場での経験の積み重ねが重要であるが、さらに保育とは別の福祉の分野で、高齢者と向き合うボランティアや、生活困窮者と向き合うボランティア、障がい者と向き合うボランティア、そして被災者と向き合うボランティアなどに参加すると学びが深まるとされる。特に災害支援ボランティアはインパクトが非常に強く、現場で拾った事柄をしっかりと振り返りをすれば、知識や技術を支える理念を直接的に自身の中に落とし込んでいきやすいと予測できる。本稿は災害ボランティアに参加していない保育学生との比較は行っていないので、今後、比較検討をしていきたいと考える。

先述の断水による困難を抱えた草間台地区では9月23日に「くさま台ニューピオーネ祭」が開催され、断水地区支援活動に携わった学生たちがお祭りに行き、被災された方々との再会を果たした。センター長はじめ地域の方々は大変歓迎してくださり、学生たちに様々なもてなしをくださった（図4）。そして、翌日、高級巨峰ブランドであるニューピオーネを学生たちのためにとたくさん贈ってくださった。ひとりの学生が「こんな風な交流になるとは思っていなかった」と、被災した地域との交流へと発展したことを喜んだように、災害というピンチへの支援に携わったからこそ、その後、地域交流というチャンスに繋がった。避けることのできない不幸な事態に直面してしまっても、一緒に克服に向けて歩むことで、それを真逆の大きな明るい未来へ変えていくことができる、その可能性を学生たちは学んだ。今回の災害ボランティアに携わった学生たちは、今後も時間を作って真備町に入る計画を立てており、さらなる成長が期待できよう。



図4 豪雨災害支援で関わった地区との交流

#### 文献・資料

- 1) 白石三恵, 島田三恵子, 岩本麻希, 安井まどか, 濱本里彩: 看護学生の防災意識・防災対策の実態とその関連要因についての文献レビュー, 大阪大学看護学雑誌 23 (1) , 1-8, 2017.
- 2) 板垣喜代子, 矢嶋和江, 北林 司, 藤原健一, 戸来陸雄, 相馬陽子: 東日本大震災後の災害被災者支援に関する学生の意識調査, 弘前医療福祉大学紀要 4 (1) , 49-53, 2013.
- 3) 毎活動終了後1週間以内に感想などのコメントを任意で求め、全てメールで寄せてもらった。最初の回答の際に、回答は任意であり、回答すること、あるいは回答しないことによって何ら利益や不利益は生じないこと、個人の回答が特定されないよう、ローデータを加工するなどの配慮をすることを説明した。同時に、回答を今後のより良い活動に活かすこと、さらに研究で採り上げることを了承した者のみメールで送信し、その送信によってこれらへの同意とすること、ローデータが記述されたメールはデータ収集後に破棄することなどの倫理的配慮について説明した。回答があったのは、参加者12名中11名であった。
- 4) 回答の収集方法、倫理的配慮については3)と同様であり、参加者12名中7名の回答があった。

